

応援と「推し」の違いに関する一考察： プロジェクションの観点から

Consideration of the Difference between Cheering and “Fave”: From the Standpoint of Projection

東 美由紀[†], 島田 真希[†], 嶋田 総太郎[†]
Miyuki Azuma, Masaki Shimada, Sotaro Shimada

[†] 明治大学
Meiji University
azuma_myk@meiji.ac.jp

概要

近年、応援に関連する言葉として「推し」という概念が一般的に受け入れられるようになってきた。両者はどちらもプロジェクションのプロセスを含むが、その関連については検討の余地がある。本研究では、個人の応援傾向による分類を元に、「推し」の有無と応援行動の調査を行った。その結果、個人の応援傾向によって「推し」の有無および応援行動の特徴が異なり、応援傾向の高さと「推し」が必ずしも同一のものではない可能性が示された。

キーワード：応援 (cheering), 推し (fave), 投射 (projection), 逆投射 (back-projection)

1. はじめに

私たちはスポーツや芸能の場においてはもちろん、家族や友人、ときには見知らぬ人に対しても応援を行う。応援はコミュニケーションないし、自己と他者との関係のひとつの形態であり、私たちの生活にとって重要な役割を担っていると言える。

応援については、様々な人を積極的に応援する人もいれば、応援することに関心を持たない人もいたように、個人によって傾向が異なると考えられる。このような個人が他者を応援する傾向については、応援傾向尺度の下位尺度得点によって、1) 様々な対象に対して応援する傾向の高い「積極的応援群」、2) 周囲の影響をあまり受けずに自身が関心を持つ対象を応援する傾向を持つ「自己充足的応援群」、3) 全体的に強い応援傾向はないが、周囲での話題性による影響を受ける傾向のある「受動的応援群」、4) 他者に対する応援が全体的に少ない傾向にある「消極的応援群」の4群に分かれることが示されている [1]。

応援を取り巻く環境は変化しつつあるが、近年は「推し」という概念が一般的に受け入れられるようになり、研究対象としても取り上げられるようになってきている。例えば、久保 (川合) (2022) は、プロジェクション (投射) の観点から「推し」についての解釈を行

っている [2]。プロジェクションとは、人が内部に持つ予測モデルを世界に対して適用しながら世界を意味づける心の働きのことである [3]。このプロジェクションによって、自己が他者に投射されることもあり、投射した他者に加えられた操作が自らの経験として逆に伝搬してくる現象もある。この現象はバックプロジェクション (逆投射) と呼ばれている [4]。「推し活」(「推し」に関する活動) としてよく行われる「推し」の外見を象ったグッズを持つことや、「推し」を模した装いをするなどの行動もこれらのプロセスの観点から説明されている [2]。また、バックプロジェクションは、それが起こった者の意識や行動に影響を及ぼすことも示されており [5]、嶋田 (2022) は、他者に対するプロジェクションとバックプロジェクションを通して、自己に変容が生じる可能性について言及している [6]。

一方、応援するという行動も、一体感 [7] や代理経験 [8]、また、自分が応援しているつもりが、逆に応援している他者によって自身が励まされる [9] といったように、応援対象と自己の間でのプロジェクションとバックプロジェクションのプロセスを含む。このため、応援と「推し」ことの間には多くの共通点を持ちつつも、微妙な力点の違いがあることが予想される。

本研究では、島田他 (2022) [1] によって示された4つの応援群の「推し」の有無、各応援群の性格特性の特徴、および「推し」に対する応援行動の調査を通して、応援と「推し」の関連について検討を行う。

2. 調査手続き

本調査は、2021年12月28日から2022年1月8日までを実施期間とし、データの収集はインターネット上で行った。分析対象は、大学生および大学院生464名(男性195名、女性269名、平均年齢21.5±1.90歳)であった。調査には、個人の応援傾向を測定する応援

傾向尺度 (島田, 2022) [1], 性格特性の質問紙として TIPI-J (小塩, 2012) [10], 「推し」の有無と応援行動に関するアンケートを用いた。

「推し」という用語については「人にすすめたいほど気に入っている人や物」と説明を行ったうえで、「推し」の有無について「いる・いない」の2択で回答を求めた。そして「いる」と答えた人には「推し」に対する応援行動についての評定を7段階で求めた。なお、応援行動については実験者が項目の選定を行うことにより、従来応援行動とされてきた声援などの形式だけでなく、コンテンツの閲覧や消費行動といった近年応援とされるようになった形式も対象に含めた。そのため、今回は次の12項目を設定した。なお、各項目の後ろに項目の省略名をカギ括弧で示した。

- 1) 現地（その人が出ているイベントなど）で、声援・拍手をおくる。「現地での声援・拍手」
- 2) 応援対象についてネットを通して他の人に魅力を伝える。「ネットで魅力を伝える」
- 3) 応援対象について会話を通して他の人に魅力を伝える、「会話で魅力を伝える」
- 4) 応援対象の出場するイベントなどに、まだその対象を応援していない人を、誘う（実際のイベントの参観・動画の視聴などを含む）。「応援していない人を誘う」
- 5) 応援するためのグッズを購入、あるいは作成する。「グッズ購入・作成」
- 6) 応援している対象に関するコンテンツ（SNS・ブログなど）をチェックする。「コンテンツのチェック」
- 7) 応援している対象に関するコンテンツに高評価を付ける。「コンテンツの評価」
- 8) その人が出ているイベントなどを見ながら（現地もしくは動画など）、心の中で応援する。「心の中での応援」
- 9) 同じ対象を応援している人と、その対象について話す。「応援者同士で話す」
- 10) 同じ対象を応援している人と一緒になって、イベントなどを見る（現地もしくは動画など）。「応援者同士でイベント参加」
- 11) 応援の言葉を直接かけるもしくは、SNSなどで送る。「応援の言葉を送る」
- 12) 手紙やプレゼントを送る。「手紙やプレゼントを送る」

3. 結果

4つの応援群（積極的応援群・自己充足的応援群・受動的応援群・消極的応援群）の性格特性の5因子について、クラスカル・ウォリスのH検定を行った。その結果、神経症傾向以外の4つの性格特性について有意差が認められた ($ps < .05$)。多重比較の結果、外向性は積極的応援群が消極的応援群と自己充足的応援群よりも有意に高い得点を示した。協調性については、積極的応援群と自己充足的応援群が受動的応援群よりも有意に高く、消極的応援群が他の3群よりも有意に低い得点であることが示された。勤勉性については、積極的応援群が自己充足的応援群よりも有意に高い得点を示した。開放性については、積極的応援群が消極的応援群よりも有意に高い得点であった。

4つの応援群それぞれの「推し」の有無を図1に示す。応援群によって「推し」がいる人といない人に偏りがあるかを調べるため、 χ^2 検定を行ったところ、有意となった ($\chi^2(3) = 16.98, p < .001, V = .19$)。残差分析の結果、自己充足的応援群において他の応援群より「推し」がいる人が有意に多く、消極的応援群におい

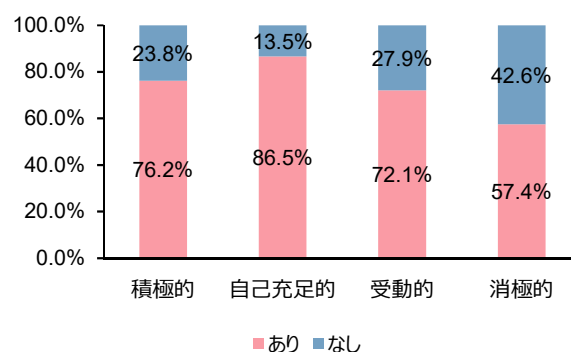


図1. 応援群ごとの「推し」の有無の割合

て他の応援群より「推し」がいる人が有意に少ないことが示された ($ps < .05$)。

「推し」に対する応援行動の評価について、全体の評価が高い順に並べた各応援群の結果を表1に示す。応援行動ごとにクラスカル・ウォリスのH検定を用いて応援群の比較を行った結果、「手紙やプレゼントを送る」以外のすべての行動について応援群の有意差が認められた。多重比較を実施したところ、主要な結果は次の通りであった。「コンテンツのチェック」、「コンテンツの評価」、「心の中で応援」については、積極的応援群と自己充足的応援群が他の2つの群よりも有意に高い値を示し、受動的応援群が消極的応援群よりも有意に高い値を示した。「応援者同士で話す」、「会話で魅

表 1. 応援群ごとの「推し」に対する応援行動

応援行動	クラスター群								χ^2	p
	積極的応援群		自己充足的応援群		受動的応援群		消極的応援群			
	n = 64	n = 90	n = 160	n = 31	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)	平均 (SD)		
コンテンツのチェック	6.44	(0.09)	6.38	(0.13)	5.86	(0.10)	4.97	(0.31)	36.27	< .001
心の中での応援	6.53	(0.09)	6.43	(0.12)	5.78	(0.11)	4.65	(0.26)	60.16	< .001
コンテンツの評価	6.09	(0.18)	5.83	(0.19)	5.39	(0.14)	4.29	(0.34)	31.33	< .001
応援者同士で話す	6.11	(0.18)	5.53	(0.19)	5.26	(0.13)	3.58	(0.33)	47.16	< .001
会話で魅力を伝える	6.00	(0.17)	5.37	(0.20)	5.26	(0.13)	4.10	(0.32)	31.42	< .001
現地での声援・拍手	6.19	(0.16)	5.27	(0.23)	5.09	(0.16)	3.74	(0.42)	30.45	< .001
グッズ購入・作成	5.77	(0.20)	5.18	(0.24)	4.85	(0.16)	4.32	(0.36)	17.37	< .001
応援者同士でイベント参加	6.03	(0.18)	5.16	(0.21)	4.86	(0.16)	3.48	(0.35)	40.89	< .001
ネットで魅力を伝える	5.53	(0.22)	4.62	(0.24)	4.55	(0.16)	4.06	(0.32)	17.86	< .001
応援の言葉を送る	5.02	(0.27)	4.06	(0.25)	4.14	(0.17)	3.77	(0.35)	11.59	.009
応援していない人を誘う	5.31	(0.24)	3.88	(0.24)	4.16	(0.16)	3.06	(0.33)	32.20	< .001
手紙やプレゼントを送る	3.81	(0.29)	3.10	(0.23)	3.01	(0.15)	2.90	(0.33)	6.04	.109

力を伝える」、「現地での声援・拍手」は、積極的応援群が受動的応援群、消極的応援群よりも有意に高い値を示し、受動的応援群と自己充足的応援群は消極的応援群よりも有意に高い値を示した。「グッズ購入・作成」、「ネットで魅力を伝える」、「応援の言葉を送る」については、積極的応援群が受動的応援群と消極的応援群よりも有意に高い値を示した。「応援者同士でイベント参加」については、積極的応援群が他の3群よりも有意に高い値を示し、自己充足的応援群と受動的応援群が消極的応援群よりも有意に高い値を示した。「応援していない人を誘う」については、積極的応援群が他の3群よりも有意に高い値を示し、受動的応援群が消極的応援群よりも有意に高い値を示した。

4. 考察

応援群と「推し」の有無について、応援傾向尺度の得点がどの下位尺度でも高い値を示す積極的応援群ではなく、自己充足的応援群に「推し」がいる人が多いという結果となった。このため、応援傾向が高いことが、必ずしも「推す」対象がいることを予測するわけではないことが示された。

積極的応援群の特徴は、「外向性」と「勤勉性」という、目標を達成することと関わりのある特性 [11] [12]

が、自己充足的応援群よりも高いということであった。応援は一般的に、パフォーマンスの成功や勝利を願って行われ、それが達成された際には応援者も代理経験により報酬が得られる。このことから、応援は目的の達成といった、「結果」と関係が深いものと考えられる。

また、「推し」への応援行動については、他者を巻き込むような応援行動において、積極的応援群と自己充足的応援群との違いが認められた。井上・上田 (2023) は「推し」に対する心理的所有感の中でも「心理的一体感」が強い者にとって「推し」は拡張自己であり、「推し」を同じくする他者は拡張された自分を応援してくれる存在になると考察している [13]。これをプロジェクションの観点から言い換えると、「推し」に自己を投射することにより、「推し」が受けている他者からの応援を、バックプロジェクションにより自分が受けているように感じられるのだと推測される。本研究の積極的応援群の特徴に「外向性」の高さがあったが、この特性が高い者は、人から褒められることも報酬として喜ばしく感じる [12]。このことが、他者を巻き込むような応援行動の高さと関連しているのだと考えられる。

「推し」のいる人が多い自己充足的応援群の特徴は、「外向性」と「勤勉性」が積極的応援群ほど高くない

ということであった。「外向性」が弱い人は、報酬に対して敏感ではなく、人から褒められることに対してもそれほど嬉しいと感じないため、対人関係にあまり関心をもたない [12]。また「勤勉性」があまり高いことは臨機応変さともとらえられ [14]、自身を柔軟に変えることと関わりがある。このような性格特性の特徴は、「推し」は独りで行う思考に没頭させてくれる場であり、それを通して自己変革の契機がある、という筒井 (2020) [15] のとらえ方と関連していると考えられる。つまり、「推し」について他の人間関係を交えず、自身が向き合うことを通して、「推し」の行動や性格特性をバックプロジェクションにより柔軟に取り入れているのではないかと推測される。他者を巻き込む応援行動が、積極的応援群ほど多くないことも、この傾向を反映していると考えられる。

本研究では、応援と「推す」ことの違いを検討した。「推し」については2つのとらえ方を示したが、どちらの「推し」のとらえ方でも、バックプロジェクションが起こっているのは、結果というよりは、「推し」と関わっているその過程であることが推測される。それに対して応援は、応援者に結果がバックプロジェクションされる可能性が示唆された。これらのことから、他者を応援したいという心理の延長線上に「推し」があるというよりは、バックプロジェクションされるものという点において、両者には相違がある可能性が示唆された。

文献

- [1] 島田 真希・東 美由紀・嶋田 総太郎 (2022). 応援傾向尺度の開発：応援行動及び共感性・性格特性との関連についての考察 日本認知科学会第 39 回大会発表論文集, 313-316.
- [2] 久保 (川合) 南海子 (2022). 「推し」の科学：プロジェクション・サイエンスとは何か 集英社
- [3] 鈴木 宏昭 (2019). プロジェクション科学の目指すもの 認知科学, 26(1), 52-71. <https://doi.org/10.11225/jcss.26.52>
- [4] 嶋田 総太郎 (2019). 脳のなかの自己と他者：身体性・社会性の認知脳科学と哲学 共立出版
- [5] Rosenberg R. S.・Baughman S. L.・Bailenson J. N. (2013). Virtual superheroes: using superpowers in virtual reality to encourage prosocial behavior *PloS One*, 8(1), e55003. <https://doi.org/10.1371/journal.pone.0055003>
- [6] 嶋田 総太郎 (2022). 自己認識：身体的自己と物語的自己 嶋田 総太郎 (編) 心と身体 (pp. 1-30) 東京大学出版会
- [7] Koide T.・Shimada S. (2018). Cheering enhances inter-brain synchronization between sensorimotor areas of player and observer *Japanese Psychological Research*, 60(4), 265-275. <https://doi.org/10.1111/jpr.12202>
- [8] Inomata T.・Zama T.・Shimada S. (2019). Functional connectivity between motor and mid-frontal areas during vicarious reward revealed via EEG time-frequency analysis *Frontiers in Human Neuroscience*, 13, 1-12. <https://doi.org/10.3389/fnhum.2019.00428>
- [9] 高橋 豪仁 (2020). スポーツの構造と応援の機能 体育の科学, 70(6), 386-390
- [10] 小塩 真司・阿部, 晋吾・カトローニ, ピノ (2012). 日本語版 Ten Item Personality Inventory (TIPI-J) 作成の試み パーソナリティ研究, 21(1), 40-52. <https://doi.org/10.2132/personality.21.40>
- [11] Nettle D. (2007). *Personality: What makes you the way you are* Oxford University Press (ネットル, D. 竹内 和世 (訳) (2009). パーソナリティを科学する：特性5因子であなたがわかる 白揚社)
- [12] 丹野 義彦 (2015). パーソナリティ理論 丹野 義彦・石垣 琢磨・毛利 伊吹・佐々木 淳・杉山 明子 (編) 臨床心理学 (pp. 47-71) 有斐閣
- [13] 井上 淳子・上田 泰 (2023). アイドルに対するファンの心理的所有感とその影響について—他のファンへの意識とウェルビーイングへの効果— 日本マーケティング学会, 43(1), 18-28. <https://doi.org/10.7222/marketing.2023.034>
- [14] 小塩 真司 (2020). 性格とは何か：より良く生きるための心理学 中央公論新社
- [15] 筒井 晴香 (2020). 特集 女オタクの現在 孤独にあること、痛くあること 「推す」という生き様 ユリイカ, 52, 72-81.